

古田史学の会・東海

東 海 の 古 代

第97号 平成20(2008)年9月

会 長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

史 跡 見 学 会 の ご 案 内

恒例の日帰り史跡見学会を計画しましたので、皆様のご参加をお待ちします。

- 1 日 時 平成20年9月21日(日)午前10時～午後4時
- 2 見学場所 ・愛知県尾張北部地域の史跡
二子山古墳(春日井市)、田県神社(小牧市)、大県神社・青塚古墳(犬山市)等。
なお、希望見学地があれば、申し出て下さい。
・見学地には、竹内会長提供の車でいきます。
- 3 参 加 料 無料
- 4 集合場所 JR中央線・大曽根駅北改札口前(名古屋市地下鉄・大曽根駅側)
- 5 集合時間 午前10時集合
- 6 申 込 先 事務局(林 伸禧) Tel&Fax：0561-82-2140
E-mail：furuta_tokai@yahoo.co.jp
- 7 申込期限 平成20年9月14日(日・例会開催日)

連載中の加藤勝美氏論考「古代史の再検討―絶対年度の復元―」での二倍年暦に関する論評です。

二倍年歴による天皇の 年代再検討に関連して

名古屋市 石田敬一

紀』の年次を探ろうとする試みの一つが干支と二倍年歴に着目した加藤勝美氏の仮説です。

ワカタケルに関する加藤氏の主張を簡潔に整理すると次のとおりです。

① 持統4年(690年)を基準として、『古事記』に記された崩御年干支を基に天皇の在位年数を想定して二倍年暦換算すると、稲荷山古墳出土の鉄剣銘文(以下「稲荷山鉄剣」という)の「辛亥年七月中記」については、30年周期なので西暦501年と考えられる。

② 稲荷山鉄剣と江田船山古墳出土の鉄剣銘文

『古事記』の天皇没年干支を基に、『日本書

(以下「江田船山鉄剣」という)によって、西暦500年前後に北は埼玉県、南は熊本県という広大な地域を支配していた大王「ワカタケル」が在世していたことが確実視される。

- ③ 501年の辛亥年にシキノミヤに在位しており、「ハツクニシラススメラミコト」(建国の祖)と称えられた崇神天皇は、古代中国史的に言えば、まさに武王そのものという存在であり、若武に最も相応しい。

- ④ 『常陸国風土記』の筑波郡のくだりに、
「古老曰筑波之縣古謂紀國美万貴天皇之世遣采女臣友屬筑筆命於紀國之國造」
とあり、崇神天皇は常陸国(茨城県)まで勢力下におさめていたことを物語る。
以上の検証から、加藤説の二倍年歴は妥当であるとするものです。

この仮説に関連して、留意すべき問題点について整理します。

1 熊本県江田船山古墳と埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘文について

＜江田船山古墳の鉄剣推定銘文＞

治天下獲口口口國大王、奉口典曹人口口、
八月中、用大鎡併四尺口刀、八十練六十口刀、服此刀者長寿、子孫注ト得三恩也、
不失其所統、作刀者名伊太口、書者張安也

＜稲荷山古墳の鉄剣 推定銘文(表)＞

辛亥年七月中記、乎獲居臣、上祖名意富比埜、其兒多加利足尼、其兒名口已加利獲居、其兒名多加披次獲居、其兒名多沙鬼獲居、其兒名半口比、

＜同 推定銘文(裏)＞

其兒名加差披余、其兒名乎獲居臣、世々為杖刀人首、奉事来至今、獲加多支國大王寺、在斯鬼宮時、吾左治天下、令作此百練利刀、記吾奉事根原也、

(1) 稲荷山鉄剣に関する古田先生の所見

定説では「獲加多支國」(原文では「國」の「口」の中は「九」)を「ワカタケル」と読んで雄略天皇に当てていますが、これに対し、古田先生の所見はどうでしょうか。

古田先生は『日本列島の大王たち—古代は輝いていたⅡ』の第6部「関東の大王」で、主に次の三点から反証しています。その趣旨を簡潔に記載します。

第一点「左治天下」

第二点「斯鬼宮」

第三点「二つの墓室」

第一点「左治天下」

「左治天下」の語句は、中国の古典に用例をもつ慣用語である。

名義上の中心権力者(天子または王)が幼少もしくは女性などのとき、これに代わってその叔父や男弟に当る血縁者がその統治を補佐する行為を「佐治」と言っている。

通説のようにこの大王を近畿天皇家の王者とし、「乎獲居臣」を武蔵の豪族とみなすのは無理だ。ワカタケル＝雄略が、幼少か女性で直接統治できず、代わって武蔵の豪族「乎獲居臣」が天下の統治を補佐していたことになってしまい、空想的だ。

また、関東の豪族との交渉など、このような人物は記紀には一切姿をあらわさない。まして、天皇が豪族との由縁を黄金文字を刻印した鉄剣を作った説話は一切ない。近畿の王者と武蔵の豪族の関係と見なすのは到底無理だ。

この鉄剣は近畿天皇家の勢力範囲内のものではないという結論を示している。

第二点「斯鬼宮」

「斯鬼宮」はシキミヤと訓むべきことにほとんど異論はない。

しかし定説のワカタケル＝雄略が、磯城宮に居した記載が記紀にはない。崇神や垂仁は師木の水垣宮(玉垣宮)とあるが、記紀ともに、雄略の宮殿は長谷(泊瀬)の朝倉宮である。

しかも、雄略の場合は名前に、長谷や泊瀬とされ、この「斯鬼宮」を雄略の朝倉宮と同定するのは不可能である。

これに対し、関東における「シキ」は、埼玉県南境に近く志木市がある。この「シキ」は和名抄にも出てくる古地名である。

その上、もっと稲荷山古墳に近い「シキミヤ」が見つかった。栃木県藤岡町おおまえの大前神社だ。その境内には明治12年建立の石碑が現存し、

「大前神社、其の先、磯城宮と号す」
という記述がある。

字名も「磯城宮」である。(前沢輝政著『下野の古代史』〈上〉有峰書店刊)

稲荷山古墳からわずか二十キロほどの地点に、延書式以前にさかのぼる古名で、そのものズバリの「磯城宮」があったのである。

地元の武蔵近辺に「シキ」の地名が多いので、もし、「大和の磯城郡の宮殿だ」といいたいのなら「大和の斯鬼宮」と書くべきだ。これに反し、当地の著名な「斯鬼宮」なら、「～の斯鬼宮」はいらないこと、これは自明の道理である。

第三点「二つの墓室」

稲荷山古墳は、5世紀末の粘土槨と6世紀初頭の礫床と二つの墓室がある。つまりそこには二人の人物が埋葬されている。

中心の位置にある粘土槨の墓室はすでに盗掘されていたが、その側にあった礫床の墓室は盗掘を免れていた。問題の金文字鉄剣はその礫床の方から出土した。

この稲荷山古墳の「主」は当然中心の位置にある粘土槨の被葬者であり、脇の方の礫床の被葬者（乎獲居臣）はその「主」の従属者である。二つの墓の位置関係はそのような身分関係を語っている。また礫床から出た銀環は被葬者が自己を第二位の者、副権力者として持する心根がうかがえる。

銘文の中の大王こそ、この粘土槨に葬られた「主」であると考えるのが論理のおもむくところだろう。(以上)

古田先生はこのほかに「獲・加多支鹵大王・寺」の分析等も提示していますが、つまるところ、この大王は「磯城宮」にいた大王であり、北関東から関東平野一帯を「天下」として君臨していた。そしてその大王に仕えた実力ナンバーワンの人物が「乎獲

居臣」で、大王を「佐治」していたと主張されているのです。

これはワカタケル＝雄略に限らず、加藤氏が主張されるワカタケル＝崇神という論述に対しても反証になると思います。私は、多元的史観に立つ古田先生の所見は、明快であると思います。

なお、最近はこうした古田説を意識してか、「佐治天下」から「佐」を外して「治天下」を強調する近畿天皇説論者がいる一方で、「寺」は大王の中国風一字名称とする古田説に賛同する学者もいるようです。

(2) 文字の問題

稲荷山鉄剣のワカタケルの最初の文字は、一般的に”獲”を当てていますが、ふるとり獣偏に「隹」と「メ」で構成された「獲」の旁に草冠がない「獲」の異体字です。

稲荷山鉄剣には、この字が6箇所に使われていますが、全て「獲」の異体字と判読できます。なお、「隹」の真ん中の縦線は6箇所の異体字全てに明確に確認できます。また、その6箇所全ての文字で、獣偏の2本目の斜めの線は縦棒線の右側に突き抜けていません。

一方、江田船山古墳出土の鉄剣銘文では、
”台(治)天下獲□□□鹵大王世”

の「治天下」に続く次の文字は、写真をよく見れば、偏の2本目の斜めの線が縦棒線の右側に突き抜けていて、手偏のようにも見えます。また、旁は「隹」の真ん中の縦線がないものと「メ」で構成されているように見えます。

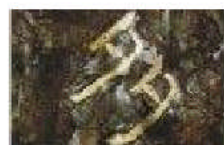
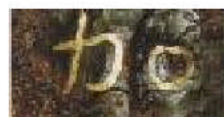
このように、江田船山鉄剣と稲荷山鉄剣の「獲」は、厳密には異なるように思われます。

”鹵”はどうでしょうか。

”鹵”の口の中の文字について、稲荷山鉄剣が「九」の字であるのに対して、江田船山鉄剣の方は「兄」か「又」の字であるようです。

写真をよく見ると、稲荷山鉄剣では、「九」と思われる字の縦線は横棒線より上に突き出ているのがわかります。一方、江田船山鉄剣は、縦線が横棒線の上に突き出ていません。

明らかに異なる文字のようです。



埼玉県

稲荷山古墳



熊本県

江田船山古墳

皇武年七月、中記乎獲居、其祖名意
冒比、其兒多加利足尼、其兒名
已加利、獲居其兒名多加利、獲居
其兒名多沙鬼、獲居其兒名半足比

皇武年七月、中記乎獲居、其祖名意
冒比、其兒多加利足尼、其兒名
已加利、獲居其兒名多加利、獲居
其兒名多沙鬼、獲居其兒名半足比

其兒名多加利、其兒名多加利、其兒名
村刀人、首奉其妻、至今獲加多支齒大
王、寺在斯、鬼宮時、大治天下、令
作此百繚利、乃記吾奉其祖、根也

皇武年七月、中記乎獲居、其祖名意
冒比、其兒多加利足尼、其兒名
已加利、獲居其兒名多加利、獲居
其兒名多沙鬼、獲居其兒名半足比

さらに、江田船山鉄剣の「獲」の次の文字は、ほとんど判読不明ですが、わずかながらに門構えのような雰囲気があります。少なくとも「加」ではなさそうです。

従って、江田船山鉄剣と稲荷山鉄剣のワカタケルの5つの文字のうち、厳密には1つ目の「獲」と最後の5つ目の文字「鹵」は異なるようです。

2つ目の文字については、稲荷山鉄剣の「加」に対して江田船山鉄剣では「加」ではなさそうであり、江田船山鉄剣の3文字目、4文字目は全く判読不能であり、両剣の文字は異なるか不明であることから、同一人物のワカタケルだと断定するのは問題です。

たとえ5文字の内”獲”と”鹵”の2文字が完全に一致していたとしても、残り3文字の一致性が認められないのに、一致していると主張される方がいれば、それは、その人の主観でしょう。

つまり、文字の一致を同一性のよりどころとして、同一人物ワカタケルとしてきた今までの見解は、問題であると思いますし、こうした不明瞭なものを根拠として両鉄剣の銘文の人名がワカタケルであると論じるのは、あまりにも恣意的ではないでしょうか。

私は、少なくとも同一性については不確かであること、これは絶対に揺るがないと思います。

(3) 読み方の問題

次に読み方の問題です。

稲荷山古墳の鉄剣には、

「獲加多支鹵大王寺、在斯鬼宮時、吾左治天下」

と刻まれています。

疑問に思う点は、“支”の字です。“支”を“伎”や“岐”の略字と見なして”キ”、さらにこれを勝手に変化させて“ケ”と読んでいると思います。

鉄剣の表面には”供、侯”、裏面には”伝、披”の字がありますが、人偏や手偏は省略されていません。となれば「支」も“伎”の人偏や“岐”の山偏を省略した字ではないように思われます。

略字でないとすれば、あくまで“シ”と読む

はずです。

「ケ」と読む根拠が全く希薄です。

また、稲荷山鉄剣の”鹵”は、口の中が”九”の字と読めますが、この字は、漢音で「ロ」、呉音で「ル」、そして『字源』によれば「ロ」です。

さらに、”獲”は漢音で「カク」、呉音で「ワク」そして『字源』によれば“カク”です。

となれば、カ(ク)カタシロとかワ(ク)カタシルと読むべきでしょう。

古田先生は第1の「獲」を動詞とし、名前は「加多支鹵大王」で全てを漢音で読み「カタシロ大王」としており、理にかなっています。これに対し通説の「ワカタケル」という読みは、漢音と呉音が混じった読み方であり、恣意的と言わざるを得ません。

従ってワカタケルとする読みには理屈がないので、説得力はないと思います。

つまり、私は、両鉄剣が、同じ人物が関係して作られたという意見には反対ですし、ワカタケルとして「若武」に違いないとの思いこみを前提にするのも疑問に感じます。

(4) 紀年の問題

江田船山鉄剣には、紀年が書かれていません。いつの時代か明確な根拠がなく、木棺に収められていた鋳留短甲と鉄鏃の形式から、江田船山古墳の築造は5世紀中葉から末頃と見られています。

しかし、ご存じのとおり、江田船山古墳とそっくり同じ鋳留短甲が出土している大仙陵古墳は、5世紀前半から中葉の築造とされています。

どちらにしても一般的に江田船山古墳の築造年代について、時期を明確に絞り込むことは難しいものの、5世紀であるでしょう。

一方、先に稲荷山鉄剣の「獲」は、「獲」の異体字であるとしましたが、これは、紀年において重要な意味を持ちます。

稲荷山鉄剣の「獲」の異体字に関して、井上秀雄は、東魏（534～550年）と北斉（550～577年）の時代にだけ異体字が使われたので、倭国にこの異体字が伝わったのは534年以後であると指摘したうえで、531年辛亥年説を否定し591年説を提唱しています。

必然的に加藤氏の501年説も否定されます。

井上秀雄が指摘するように「獲」の異体字が東魏や北齊の時代の頃のみに使われたのだとすれば、どちらにしても6世紀のことです。

となれば、江田船山鉄剣は5世紀で稲荷山鉄剣は6世紀で、築造、埋設年代が異なるように考えられます。

(5) 大王の呼称

この時期に「大王」と呼ばれるのは近畿王朝の天皇いわゆるワカタケルだけでしょうか。

加藤氏は大王と呼ばれるのは、近畿王朝の天皇に違いないと主張されますが、同時期の日本列島に大王は一人だけというのが正しい認識でしょうか。私は違うと思います。

たとえば、信濃の民話の「八面大王」です。すこし時期は下るものの、この大王は、明らかに近畿王朝に反抗した人物ですが、「大王」と呼ばれています。なにも大王は近畿王朝だけの特権ではありません。

また、^{すだ} 昨年^{すだ}の4月に私は「隅田八幡神社の文帯神獸鏡の銘文について」と題して和歌山県の隅田八幡宮所蔵の人物画像鏡についてコメントしたところですが、ここでも近畿王朝には登場しない日十大王・年が出現します。日十大王・年にあたる近畿王朝の天皇は存在しません。

癸未年八月日十大王年男弟王在意柴沙加宮
時斯麻念長寿遣開中費直穢人
今州利二人等取白上同二百旱作此竟

つまり、必ずしも大王は同一時期に1人ではないということです。

ある地域において、優れた業績を残した王は、王の中の王すなわち大王と呼ばれるのではないのでしょうか。こうした思考が自然だと思います。

5世紀から6世紀の時期に近畿天皇家が九州の熊本から関東の埼玉まで支配し、ただ一人大王と呼ばれていたという証拠もないようです。

なんでも近畿に結びつけてしまう行き過ぎた姿勢に警鐘を鳴らしたのが、古田史学だと思います。この鉄剣の意味するところは、九州から関東までが統一権力に覆われていたのではなく、物流の広域性を示すもの、そのように考えるほうが妥当ではないのでしょうか。

江田船山鉄剣や稲荷山鉄剣と同様の鉄剣は、大仙陵古墳からも出土するばかりではなく、朝鮮半島からも出土しています。日本列島から朝鮮半島まで同じタイプの鉄剣の広がりが見られるのです。これは統一権力に起因するのではなく、物流の問題、文化の広がりの問題ではないかと思います。

以上のとおり、文字の一致性、ワカタケルという読み方、紀年、大王呼称の唯一性の4点について問題があると考えます。

2 崇神とワカタケルの同一性について

加藤氏は、崇神とワカタケルは同一人物とする見解です。

しかし、崇神とワカタケルの名前には、共通性(一致性)がないので、私はこの見解を疑問に思います。

書記には、崇神の和風諡号を御間城入彦五十瓊殖天皇(みまきいりびこいにえのすめらのみこと)とし、また御肇國天皇(はつくにしらすすめらみこと)と称えられます。古事記では御真木入日子印恵命(みまきいりひこいにえのみこと)です。

江田船山鉄剣や稲荷山鉄剣は、崇神天皇が獲加多支鹵とサインした根拠であるとすれば、なぜ、和風諡号に獲加多支鹵の文字が入っていないのでしょうか。また「若武」であるとするならば、和風諡号のどこかにその文字が入っていないとおかしいでしょう。

ところが崇神天皇以外に、崇神天皇と同時代人で、若武の名が付いた者がいるのです。

崇神天皇の異母弟として記紀に記述のある若武吉備津彦(大吉備津彦)がそれです。

私は、若武吉備津彦がワカタケル、その人であるとは全く支持しませんが、ワカタケルの呼び方にふさわしいと思われるのは、崇神天皇よりむしろ若武吉備津彦であることは誰の目にも明らかでしょう。若武吉備津彦についての考証が必要ではないのでしょうか。

3 ヲワケについて

稲荷山鉄剣ではオオヒコから始まるヲワケまでの八代の系譜を示し、ヲワケが大王にお仕え

したことを記しています。

オオヒコ → タカリスクネ → テヨカリワケ
→ タカヒシワケ → タサキワケ → ハテヒ
→ カサヒヨ → ヲワケノオミ

通説では、ヲワケの祖であるオオヒコ（意富比埴）は崇神紀の四道将軍の一人「大彦」であるとしています。

しかし、ワカタケルを10代崇神に当てはめると、ヲワケが崇神と同時代ですから、ヲワケの8代も前の祖オオヒコと崇神が同時代となることは不可能でしょう。

また、22代雄略天皇をワカタケルに想定する場合も、オオヒコは第8代孝元天皇の皇子で14代前になりますから、ヲワケの系譜8代前と比べると無理があると思います。

さらに、根本的な疑問として、ヲワケノオミは、先祖代々杖刀人首じょうとうじんしゅと記されています。となれば、近畿王朝の親衛隊長として位置づけのある者が明確に記紀に記述されているはずですが、それありません。また近畿の代々の親衛隊長だとすると、このような剣が地方になぜ納められたのが疑問です。

また、近畿に支配された地方の豪族のことだとすると、天下を佐治するというのはやや大げさに思えます。

となれば、ある王朝、たとえば稲荷山王朝の大王に仕えた親衛隊長だったと考えるのが妥当です。

従って、私は、ヲワケノオミは、この稲荷山古墳の周辺に王朝を構える大王とともに埋葬された大王の親衛隊長と考えています。

この点、以前に示したとおり、古田先生が主張されている稲荷山古墳から20kmほどにある磯城宮、稲荷山古墳における大王とヲワケノオミの埋葬方法などと合致するものです。

4 安本美典氏の一月十五日説

安本美典氏のいう15日をもって1ヶ月とする仮説は、『古事記』に記されている崩御年月日が明記されている全ての天皇を調べて、いずれの場合も15日以前に崩御していることが論拠だと思います。加藤氏が、『東海の古代』92号（平成20年4月）の10ページ第2表「古事記崩御年月日」で示されたとおりです。

代	天皇名	古事記 没年令	日本書紀 没年令	古事記崩御年月日	日本書紀崩御年月日
10	崇神	168	119	戊寅年十二月	
13	成務	95	107	乙卯年 三月十五日	
14	仲哀	52	52	壬戌年 六月十一日	
15	応神	130	111	甲午年 九月 九日	
16	仁徳	83	143	丁卯年 八月十五日	仁徳八十七年 春正月十六日
17	履中	64	70	壬申年 正月 三日	
18	反正	60	—	丁丑年 七月	反正五年 春正月二十三日
19	允恭	78	—	甲午年 正月十五日	
21	雄略	124	62	己巳年 八月 九日	
22	清寧	—	若干		清寧五年 春正月十六日
23	顕宗	—	—		顕宗三年 夏四月二十五日
26	継体	43	82	丁未年 四月 九日	
27	安閑	—	70	乙卯年 三月十三日	安閑二年 冬十二月十七日
30	敏達	—	48	甲辰年 四月 六日	
31	用明	—	48	丁未年 四月十五日	
32	崇峻	—	—	壬子年十一月十三日	
33	推古	—	75	戊子年 三月十五日	
35	皇極				齊明七年 秋七月二十四日
37	齊明				

この安本氏の”一月十五日説”は、二倍年歴を具体的に示した試みとして評価できるといえます。(古田先生も安本氏と同じ考えのようです。)ただ、二倍年歴は、安本氏の示す『古事記』のみならず、『日本書紀』においても天皇の崩御年齢が2倍と思われる記述があることから、書紀においても、一月十五日説が成立する必要があると私は思います。

そこで、私は、天皇の崩御年月日を書紀で調べました。すると、7ページの表のとおり崩御の日が15日以降のものが、一つといわず、複数にわたって事例がありました。

ひとつでも16日以降の日付があれば、”一月十五日説”は成立しないと思います。ましてや複数の事例があつては、仮説としては成立しないと思います。

さらに、”一月十五日説”には、もうひとつ疑念があります。

書紀には、春正月とか夏四月、秋七月、冬十二月などの記述があります。

”一月十五日説”に立てば、現在の半年で一年ですから、旧暦の1月1日から15日が安本説の1月、旧暦の1月16日から30日が安本説の2月ということになるでしょう。また、旧暦の七月から十二月で次の一年とカウントすると思われるので、旧暦の7月の前半の15日が安本説の1月、後半が2月のはずです。ですから、旧暦の7月は、安本説でいう2年目の1月と2月に当たるわけです。この1月、2月はそれぞれ書紀の記述では、秋一月(秋正月)、秋二月と記載されるはずです。

しかし書紀では、秋一月(秋正月)、秋二月の記述はないようです。つまり”一月十五日説”は成り立たないでしょう。

ただ、100歳以上の天皇の寿命については、明らかに二倍の年齢と考えざるをえません。

従って、考えられる結論は、通常の時代の数え方は一倍年歴で、年齢についてのみ2倍つまり1年につき2歳を数えるということではないかと思われます。

こうした考え方については、『古田史学会報』No. 54(2003年2月11日)で、「ソクラテスの二倍年歴」と題し、古賀達也氏が

「古代ギリシア人はカレンダーは一倍年歴で、

年齢表記は古い二倍年歴の慣習に従っていた(二倍年齢)、というケースが想定される」と指摘されています。

関係する記述を抜き出しますと次のとおりです。

—前略—

この記述からわかるように、当時既にギリシア人は一年を三六五日と認識している。従って、彼らは一倍年歴のカレンダーを使用していたと考えざるを得ないのである。そうすると、明らかに二倍年歴としか考えられない年齢表記はどのような理由によるものであろうか。本連載前回(「孔子の二倍年歴」)末尾にて指摘したように、古代ギリシア人はカレンダーは一倍年歴で、年齢表記は古い二倍年歴の慣習に従っていた(二倍年齢)、というケースが想定される。もう一つは、古い二倍年歴と新しい一倍年歴の混在・併存のケースだ。あるいはその両方のケースもありうるであろう。これらのうち、個々の史料や当時のギリシア社会一般がどのケースであったのか、現時点では判断し難い。慎重に留保し、これからの研究に委ねたい。

—後略—

(『古田史学会報』No. 54、「ソクラテスの二倍年歴」)

このように、古賀達也氏は、慎重に意見を留保されているところです。

しかし、私は、先に述べたとおり、年齢表記のみが二倍、つまり「二倍年齢」という考え方を支持するものです。

『三國志・東夷伝』の『魏略』脚注に

「其俗不知正歳四節但計春耕秋収爲年紀」

とあるとおり、倭人は正しい歳を知らず春耕と秋収で年紀つまり年齢を為すと言うことです。

「年紀」には、「①年、年代」という意味と、「②年齢」という意味がありますが、「年紀」の前に「不知正歳」と出てくることから、この「年紀」は年齢のことであるでしょう。

つまり「二倍年歴」ではなく「二倍年齢」が相応しいと思います。

前号に引き続いて、加藤勝美氏の「古代史の再検討―絶対年代の復元―」を掲載します。

目次

- 1 はじめに
- 2 不可思議な記紀の記述
- 3 記紀に記された年齢
- 4 暦法の開始
- 5 在位年数の問題
- 6 実年代の復元
- 7 稻荷山鉄剣銘（検証その1の準備）
- 8 江田船山鉄剣銘（検証その1の準備）
- 9 倭の五王をめぐって
- 10 武王について（検証その2の準備）
- 11 五王の検証（第2の検証）
- 12 天皇と五王の対応
- 13 日本の天皇、皇太子、皇子皆死去
- 14 「皆死去」の事実（検証3の準備）
- 15 実年代で検証する「皆死去」
- 16 天神は神にあらず
- 17 推古天皇の筈がない
- 18 開皇二十年の在位天皇
- 19 継体天皇の検証
- 20 『隋書』倭国伝をめぐって

古代史の再検討(7)

―絶対年代の復元―

名古屋市 加藤勝美

2.1 倭国と倭国

『隋書』倭国伝には色々問題があるが、最初にとりあげなければならないのは、「倭国」の「倭」（タイ）の文字である。

他の中国史書、『後漢書』、『三國志』、『宋書』、『舊唐書』等々には「倭」が使われているのに『隋書』だけは「倭」なのである。なぜであろう。特別な理由があるのだろうか？

私自身はこうした一言一句にこだわって追求するやり方はあまり好まない。つついその字句に集中し、物事の本質、内容、全体といった、より重要な核心部分を曲解しかねないからである。

結論を先に言ってしまえば、「倭国」は「倭

国」の単純ミスであり、それ以外に考えられない。

なぜなら『隋書』倭国伝の内容全体を読んでみれば一目瞭然だ。大部分は『三國志』魏志倭人伝の焼き直しであり、他の部分も明らかに倭国のことを記しているからである。

こうした単純ミスに惑わされて字形を追ったり用例を調べたりしても「労多くして益無し」となりかねない、と危惧する。

ここで思い起こすのは、「邪馬台国」は「邪馬壹国」とする古田武彦説である。これが『三國志』の単純ミスか否かはしばらく問わない。古田説の功罪については本論の最終回に述べる予定だが、一点だけ強調しておきたい。結論はどうあれ、古田説が史学界に与えた影響力は小さくなく、大きく評価されなければならない。

さて、本題に戻ろう。

「倭国」は「倭国」の単純ミスと考えてほぼ間違いはないが、いやしくも「倭国」は国名である。漢字に厳しい中国人が「倭」と「倭」を簡単にミスとも思いにくい。

『隋書』に「倭」の文字は幾度も登場する。ひとつ考えられるのは撰者の魏徴が強く「邪馬台国」（ヤマトイコク）を意識していて、「倭国」とした可能性である。が、それは可能性であって、適正とは言い難い。やはり単純ミスとするのが適切であろう。

2.2 二人大王制

『隋書』倭国伝には非常に注目すべき一文がある。前回紹介した訳文を次に再掲しよう。

天子(上)は、臣下(所司)に其の国の様子を尋ねさせた。

使者は次のように答えた。

「王は天を以って兄と爲し、日を以って弟としています。未だ夜明けになる前から宮殿にお出ましになって、跣足の形でお座りになり、政(まつりごと)をお聴きになります。日がのぼって来ると、政をおやめになり、おっしゃいます。後は弟に委ねよう、と」(B)

ここで、倭国の使者が「王は天を以って兄と爲し、日を以って弟としています。」と発言しているのが注目点だ。むろん、天は、宇宙だの

空だのではない。『隋書』倭国伝に、「姓は阿毎、字は多利思比孤、號は阿輩雞彌」とあるように、「アマ」という姓なのである。注目されるのは、「日を以って弟としています。」の部分である。むろん、「日」も太陽や暦のことではなかろう。「日」（ヒノ氏、あるいはジツ氏か？）という姓に相違ないのである。

つまり、大王は二人いて複数で政務を執り行っていたことになる。姓が異なっていることからすると、「兄」や「弟」は実際の兄弟を指しているのではなく、格付けを意味しているに相違ない。少なくともそう考えて無理はない。原文には「王以天爲兄以日爲弟」とある。「爲」すなわち「～とする」という意味の文字である。むろん格付けの上位者は「兄貴分」たる「天氏」である。「日氏」の方は「弟分」だが、実質的には「天氏」と同等だったに相違ない。大統領にたとえると「日氏」は副大統領ではない。大統領格である。なぜなら、日がのぼってからの政務は「日氏」が単独で行なう権限をもっているからである。

この一文を書いている、私は、和歌山県橋本市の「隅田八幡神社」が所蔵している人物画像鏡のことを思い出した。鏡の銘文は次のように始まっている。

癸未年八月日十大王年男弟王在意柴沙加宮時

ここに出てくる「日十大王」は姓が「日」で名は「十」という人で、ちゃんと大王と呼ばれている。この時はもう一人の大王である「天氏」の方は空位の時期だったかもしれない。なぜなら、わざわざ「日十大王年」と記されているからだ。

「日十大王年」は「日十大王の御世」という意味に相違なく、すなわち、男弟王（つまり本来は夜が明けてから政務をとる王者）の時代だったという意味になる。こなれた現代日本語に訳してみれば次のようになる。

「癸未年八月、日十大王が国を治めていらっしゃった時、すなわち、男弟王が意柴沙加宮において国を治めていらっしゃった時」

ここに一点だけ腑に落ちない表現がある。「男弟王」とわざわざ「男」の文字が冠せられてい

ることだ。男性の王者という意味だとすれば蛇足である。弟王という表記だけで男性の王者ということが分かるからである。では、「男」の一字は何のために冠せられているのであろう。人物画像鏡の銘文だけを眺めていたのではいつまでたってもはっきりしない。蛇足であっても、「男」の一字を冠することによって男の王であることを強調したかったのだ、という解釈はあり得る。むろん、それもある。けれども、長文にわたる著作ならそうした強調もあり得ようが、極端に文字数が限られ、一字たりとおろそかにしたくない銘文の世界である。単に男性たることを強調せんがために一字を加えんとするのは非常に考えにくい。すくなくとも甚だ不自然である。では「男」の一字は何のために付加されているのか？

この謎を解く鍵が『隋書』倭国伝に表記されている、と私は考える。倭国の使者が述べたという次の一文をもう一度読み返していただきたい。

王以天爲兄以日爲弟。天未明時出聽政跣跣座日出便停理務云委我弟

いかがであろう。「天」も「日」も共に姓（氏）であるらしいことが強く意識される筈である。冒頭の「王」が主語であることは一点の疑いもない。倭王は、天をもって兄とし、日をもって弟としている。つまり、「天」も「日」もともに倭王だというのである。むろん、王という以上、「天」も「日」もともに人である。「天氏」と「日氏」に相違ない。「天氏」の方は「姓は阿毎」という表記でわかるように、「アマ氏」である。ところが「日氏」の読みははっきりしない。「ジツ氏」や「ヒノ氏」の類かと思うが確かなことは言えない。「天」と「日」が実の兄弟かということ、私にはそうとは思われない。実の兄弟ならわざわざ「天をもって兄とし、日をもって弟とする」などという言い方をする筈がないからだ。実の兄弟でないからこそ、「兄とし、弟とする」と説明しているわけである。

以上の事実を確認しておいてから、人物画像鏡の銘文を読み返せば付加されている「男」字の意味が明らかになってこよう。弟王は兄弟の意味での「弟」ではない。「兄王」たる「天氏」

に次ぐ、否、「天氏」と同等の「大王」なのである。人物画像鏡に明刻された「弟王」はしたがって、実の弟などではなく、一種の称号に相違ない。そうして、こう理解したとき「弟王」は、必ずしも男性に限定されないことが分かる。実際に王位についた例があるか否か分からないが、女性の「弟王」もあり得るわけである。頭に冠せられた「男」字は、したがって、強調などではなく、現在の「弟王」は男性であることを示す、いわば識別の意味がこめられている、と私は考える。逆に「兄王」すなわち「天氏」の方も男性とは限らず、女性、つまり女王であっても差し支えないことになる。

ここで思い起こされるのは『魏志倭人伝』に登場する女王卑弥呼と男弟の関係である。私の拙訳で恐縮だが、関係部分を紹介しよう。

その国は、もと男子を王としていた。男王の時代は、七、八十年続いたものの、この間、倭国は乱れ、国々は互いに攻撃し合う状態が続いた。そこで、国々は共に一人の女子を立てて王とした。彼女の名はヒミコ(卑弥呼)というが、鬼道に仕え、うまく人心を眩惑している。歳はすでにかなりの年齢であるが夫は持っていない。彼女には男弟がいて彼女の政治を助けている。彼女が王となってからは、直接彼女を見た者は少なく、婢千人を侍らせている。ただ一人の男子だけが例外で、飲食を給仕したり神託をうけるために彼女のもとに出入りしている。宮室、楼観、城柵を蔽そかにしつらへ、常に人々がおり、さらに兵士たちが守衛している。

(拙著『真正面からの「魏志倭人伝」』108頁)

ここに出てくる男弟は文字通り実の弟に相違ない。「一男子をもって弟となす」という表現にはなっていないからである。男弟の部分の原文は有名な「有男弟佐治國」の一文だ。蛇足かも知れないが、「佐」は「補佐する」という時の「佐」で、助けるの意味である。また、「治」は「政治」の「治」で、治めるの意味である。もしもこれが「女王以一男子為弟男弟佐治國」とでもなっていれば、まちがいなく、弟は称号と考えていい。が、いきなり「有男弟」であるから、この場合は実の弟に相違ないのである。

今は男弟のことより、ちょっと注目していただきたいのは、「彼女が王となってからは、直接彼女を見た者は少なく」の部分である。これは、卑弥呼が鬼道を行なうのは深夜から明け方にかけての時間帯だったからで、日中は睡眠中だったのではなかろうか。もしもそうだったとすれば、日中に姿を現すことは難しく、直接彼女の姿を見る者は極限されてしまう。

卑弥呼が在世した時代は三世紀だが、夜間と日中を二人の王が分担して治めるという形が、すでに三世紀に行なわれていたことを意味する。『隋書』に記された二人の倭王が夜間と日中を分担して治めていた、という七世紀初頭の政治形態は、すでに卑弥呼の時代にその萌芽をみてよいのかもしれない。

23 皇后と皇太子

『隋書』倭国伝の次の一文も謎に満ちている。前回紹介した訳文を再掲しよう。

これをお聞きになって天子はおっしゃった。「抽象的でさっぱり分からぬ」と。そして、使者に注意なさり、もっと具体的に説明させた。

(使者によると)

王の妻の名は雞彌という。後宮には女が六、七百人いる。太子の名は利歌彌多弗利ということである。(C)

王の妻、すなわち天皇の皇后の名は雞彌(キミ?)で、皇太子の名は利歌彌多弗利(リカミタフリ?)と記している。これは中国人が耳にした名前を一音一字に写し取ったものに相違ないので、たとえば「弗」を「ブツ」などと二音にして読むことはできない。

阿毎多利思比孤は、九分九厘継体天皇に相違ないので、問題は継体天皇の皇后名は「雞彌」で、皇太子名は「利歌彌多弗利」なのかという点に帰着する。

既述したように継体天皇の皇后は「手白香皇女(タシラカヒメミコ)」で、雞彌(キミ?)とは似ても似つかない。もっとも「姓は阿毎、字是多利思比孤、號は阿輩雞彌」の場合のように、「阿輩雞彌」が「オオキミ・・大王」と解釈され得るなら「雞彌」は固有名詞ではなく倭国の使者が皇后を「キミ」と称していた可能性

もあるが……。どうしても分からないのは、「利歌彌多弗利」である。継体天皇の皇太子は「勾大兄皇子（マガリノオオエ）」である。どういう訓み方をしようと全く「利歌彌多弗利」とは結びつかない。

「阿每多利思比孤」は古田武彦説のように、やはり九州王朝の大王なのだろうか？だが、不一致があれば、即、九州王朝のことだ、というのでは議論にならない。つまり何らかの不一致や瑕疵を見つけてそれ「九州王朝」ということほど楽なことはない。「そうかもしれないし、そうでないかもしれない」のにそう論定できるなら、論者の仕事は単に不一致や瑕疵を見つければいいことになる。

最低限「九州王朝」の大王の姓が「阿每」であったことを証明しなければなるまい。

それはさておき、継体天皇の皇太子名が「利歌彌多弗利」でない点は「阿每多利思比孤＝継体天皇」という私の説の欠陥である。

欠陥は欠陥として認識しつつ追求しないと学問とは呼べない。単に自説の自己主張に終始しただけになり、真実がぼやけてしまう。

継体天皇の皇后名に疑問符がつき、皇太子名が「利歌彌多弗利」でないとする、念のために、継体天皇から（多利思比孤と言われてきた）推古天皇まで八代の皇后と皇太子をみても必要がある。

第14表をごらんいただきたい。

継体天皇から推古天皇に至る天皇の皇后名や皇太子名の誰一人として「雞彌」や「利歌彌多弗利」に結びつきそうにないこと、誰の目にも明らかである。では、継体天皇は「阿每多利思比孤」ではないのか？

もう一度第14表をごらんいただきたい。

『隋書』が記す「男王」であり、「皇后」を持ち、「皇太子」を立てているという条件に合致している天皇は、継体天皇を除く七天皇中、たった二天皇である。加えて、既述したように、実年代推計（第5表）によれば、開皇二十年（600年）に在位した天皇は継体天皇をおいてほかにない。かつ「阿每多利思比孤」は最低限、開皇二十年（600年）から大業三年（607年）まで王位についている。『日本書紀』の在位年数を二倍年暦に換算して継体天皇の在位を

割り出すと、まさに600年から607年にどんぴしゃり該当している。以上のような数々の合致はとうてい偶然とは思われない。阿每多利思比孤は九分九厘継体天皇に相違ない、と論定せざるを得ない。

では、皇后名や皇太子名の不一致は何か？正直私には答えることができない。『日本書紀』に記された皇后名や皇太子名は地名や氏族名ないし宮を表している場合が少なくなく、真の固有名称とは限らない。生存中に何と呼ばれていたか不明だ。不一致の原因はここにあるのだろうか。今後の研究にまきたい。

第14表 継体から推古天皇の皇后と皇太子

代	天皇名	皇后(よみ)	皇太子(よみ)
26	継体	手白香皇女 (タシラヒメミコ)	勾大兄皇子 (マガリノオオエ)
27	安閑	春日山田皇女 (カスカノヤマダヒメミコ)	なし
28	宣化	橘仲皇女 (タチバナナカツヒメミコ)	なし
29	欽明	先后が石姫(イシヒメ)、 後后が豊御食炊屋 姫(トヨミケシキヤヒメ)	詔語田淳中倉太 球敷尊(オサタノサクラ フタマシキ)
30	敏達	広姫(ヒロヒメ)	なし
31	用明	穴穂部間人皇女 (アナホベノマヒトノヒメミコ)	彦人皇子 (ヒコヒトノミコ)
32	崇峻	なし	なし
33	推古	(敏達天皇の皇后)	厩戸皇子(聖徳 太子)(ウヤマトノミコ)

24 冠位12等

また、『隋書』倭国伝には「利歌彌多弗利」の記述に続けて次のような記述が見える。

内官有十二等、一曰大德、次小德、次大仁、次小仁、次大義、次小義、次大禮、次小禮、次大智、次小智、次大信、次小信、員無定

いわゆる冠位12等制である。これに対し、『日本書紀』推古紀11年12月の条に次のように記されている。

○十二月戊辰朔壬申、始行冠位。

大徳・小徳・大仁・小仁・大禮・小禮・大信・小信・大義・小義・大智・小智、并十二階

両者を比較すればただちに知られるが、冠位名は合致しているが、下位の八冠位は全く順位が異なっている。なぜであろう。理由は不明だが、私は次のように考えている。

第一、この記事は開皇二十年（600年）の記事だが、すでに詳述したように、当時は暦法がまだ二倍年暦の真っ最中。時代は継体天皇の時代だ。推古朝は640年代から650年代の筈で、半世紀近く後の時代。冠位12階制が本当に推古朝から開始されたか否かは不明。いずれにしろ、『隋書』記載の冠位12階制は推古朝よりはるか以前の時代の制なので異なっているのも不思議はない。

第二、古田武彦説に従えば、『隋書』記載の冠位12等は九州王朝の制度ではないか、という可能性がある。

が、この場合は記紀の文言や万葉集の文言を捉えて近畿王朝が「換骨奪胎」を計った、という証明法では脆弱だと思う。「換骨奪胎」だの「剽窃」だのでは、論者がフリーハンドに立脚することになり、いかなる論法もあり得てしまい、いまいち客観性に欠ける。なにかもっと直接的な証明が望まれよう。

25 国書「日出處」等

次は国書である。『隋書』倭国伝は大業三年（607年）の条に倭国の国書の書き出しの部分を取り上げ、次のように記している。

其國書曰「日出處天子致書日沒處天子無恙」云云。帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰「蠻夷書有無禮者、勿復以聞。」

意味は次のとおりである。

その国書は記している。『日出ずる處の天子、書を日没する處の天子にご挨拶申し上げます。お変わりございませんか』云々。

帝はこれをご覧になって悦ばれなかった。鴻臚卿が申し上げた。『蛮夷の書ですから無礼もありましょう。再度ご覧にならなくてよろしいでしょう』と。

通常「不悦」は「怒った」と解釈されているが、妙である。自国の帝を「日出處天子」、隋の帝（煬帝）を「日没處天子」といい、無礼だ

として「怒った」という解釈のようである。

しかしそうだろうか？「致す」は「ご挨拶申し上げます」という意味であり、「恙なきや」は「お元気ですか」ほどの意味である。つまり書き出しの内容は単なる挨拶文に過ぎない。また、「日出處」は東方、「日没處」は西方という意味だ。仏教用語にもあるようである。

あまり知られていないが、『三國志』の「魏志東夷伝」には序文がついている。そして、「東臨大海長老説有異面之人近日之所出」という一文がある。訳出するまでもなく、ここに記されている「日之所出」は「東方」の意である。むしろ「魏志東夷伝」には「倭人伝」が入っている。ここで少し敷衍すると、「東臨大海」は、中国の軍隊が朝鮮半島の東海岸に達し、「大海を前にして」という意味である。

「魏志倭人伝」のみを読んでも全く分からないが、「東臨大海云々」の一文で「魏志東夷伝」の著者は、邪馬壹国（邪馬台国ではない）とは別に東方に異面の人々の国（そこには日本の本州島しかない）があることを記している。

「日出處」云々はさておき、国書にわざわざ相手を怒らせるような挨拶文を送りつけるだろうか。それも貢ぎ物を携えて使者を差し向ける側の倭国王が・・・。

事実、書き出しの内容は相手国を見下す意図など全く感じられない、形式的、儀礼的な挨拶文でしかない。

しかし、原文には「不悦」とあり、帝の臣下は「無礼」と言った、とある。もういいだろう。私は「不悦」は文字通り「不悦」であって、「憤」でもなければ「怒」でもないと思う。

では、なぜ煬帝は不機嫌（不悦）な顔をしたのか。文面に何の問題もないとすると、ただ一点、「天子」が問題となる。大方周知のように、中国では帝のことを「天子」と呼んできた。逆に「天子」といえば帝のことであって、周辺諸国をも含めて他に「天子」を称える者はいなかった。その「天子」の称号を東夷の者が称えているのを目にすれば煬帝でなくとも不機嫌になろう。臣下なら「無礼」と言上したくもなろう。ただ、外国のことなので、不機嫌にはなったものの「怒り」にまでは達しなかった。「憤怒」となれば、倭国の朝貢など受ける筈もなく、使

者はただちに追い返されるだろう。下手をすれば切って捨てられかねない。

以上は、非常に重要なことを示している。

国書に相手国を不機嫌にさせたり怒らせたりしようという意図は全く感じられない。では、なぜ反感を招くような「天子」を名乗ったのだろう。回答はたった一つである。倭国王は本当に「天子」を名乗っていた。別に対等意識や優越意識からではない。本当に「天子」を名乗っていたので、「天子」と記した。この一点である。

翻って近畿天皇家の王者（大王）は「天子」という呼称を用いた形跡はない。私の知る限り「大王」であって決して「天子」とは呼称していない。

では、七世紀初頭に「天子」と名乗っていた「多利思比孤」はどこの大王であろう。古田武彦説のように九州王朝の大王なのだろうか？

とすれば、近畿天皇家は九州王朝の一族から継体天皇を迎え入れたのだろうか？大きな謎だ。

私は、九州一円を平定したという意味での王朝、すなわち古田武彦説にいう九州王朝の存在に疑問を抱いている。倭のいくつかの国の一つ、すなわち倭の奴国が中国に朝貢していたと考えている。

『隋書』倭国伝には次のような一文もある。

明年、上遣文林郎裴清使於倭國。度百濟行至竹島南望瀨羅國經都斯麻國迴在大海中。又東至一支國又至竹斯國又東至秦王國。其人同於華夏以為夷洲疑不能明也。又經十餘國達於海岸。自竹斯國以東皆附庸於倭。

明年は大業四年（608年）のことだが、ここで注目は最後尾の「自竹斯國以東皆附庸於倭」の部分。「竹斯國」は「筑紫國」すなわち九州のことに相違ないので、九州より東側（すなわち本州及び四国等の西日本のことか？）はすべて倭に付属している、と記している。この部分、倭國全般の説明と解釈すれば、単に日本列島の地理的説明となる。ではなくて「竹斯國」を九州王朝と解釈できれば「竹斯國」は日本を代表する王朝で、九州より東側は同王朝に属していたことになる。だが、原文には「竹斯國」

は「都斯麻國」、「一支國」、「秦王國」等と並列して書かれている。これでは「竹斯國」は「都斯麻國」や「一支國」さえ従えていないことになる。「竹斯國倭王之所都」とでも記されていればまぎれがないのだが・・・。

原文に従う限り「竹斯國」が九州王朝すなわち倭國であったとは断言しがたい。では倭國とは何か？文末の「皆附庸於倭」のみでは不明といわざるを得ない。「於倭」とは単に「日本に」という意味でしかないから・・・。

平成20年5・8月の例会で発表した内容に一部手直しをしたものです。

『隋書』倭国伝の倭王について

瀬戸市 林 伸禧

1 はじめに

古田武彦氏は、『失われた九州王朝』（朝日文庫、1933年1月発行）で「第三章の4『隋書』倭国伝の示すもの―「北」と「比」」（296頁）で、『隋書』東夷伝倭國での倭王は「多利思北孤」であるとされています。

岩波文庫『新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝―中国正史日本伝(1)』（新訂版、1985年5月発行）での「隋書倭国伝」の訳文で、「倭」を、冒頭の注で『隋書』は倭を倭につくる。以下すべて倭に訂正した。付録、原文（※百衲本）参照

とされたが、倭王については註書きなしで「多利思比孤」としています。

このことから、あらためて検証してみました。

2 検証方法

(1) 『隋書』で、近隣諸国を記載してある「巻81～84（列伝第46～49、東夷、南蛮、西域、北狄伝）」の「北、背」及び「比、皆、昆」文字、全てを拾い出し、その字体を確認しました。

検証書物は、岩波文庫で原文としている「百衲本」（百衲本二十四史、元大徳刊本、台

湾商務印書館発行）を用いました。
その結果は、表 1 のとおりです。

表 1 『隋書』巻 8 1～8 4 における「北（背）・比（皆、昆）」の個数表

目 次			北 偏		比 偏			備 考
巻 数	列伝巻数	別 称	北	背	比	皆	昆	
巻 8 1	列伝第 4 6	東夷伝	1 2 (0)			1 1 (1 1)		
巻 8 2	列伝第 4 7	南蛮伝	7 (0)			6 (6)		
巻 8 3	列伝第 4 8	西域伝	3 0 (0)	1 (0)	3 (3)	1 0 (1 0)		
巻 8 4	列伝第 4 9	北狄伝	4 6 (1)		3 (3)	7 (7)	1 (1)	
計			9 5 (1)	1 (0)	6 (6)	3 4 (3 4)	1 (1)	

※ 1 拾出し個数は、「別表 『隋書』巻 8 1～8 4 の「北、比」等抜書き表」より算出。

2 「北・比」の区分は、熟語（東北・南北等）、文言からおこなった。

3 () 内の数字は横棒線が縦棒線よりはみ出していない「正しい」漢字数。

(2) 調査結果

「北」と「比」が混同されやすいのは、左側の字体で、横棒線が縦棒線より互いにはみ出し（横棒線が縦棒線を切断）している場合です。

各々の字体を別表より確認すると表 2 のとおりでした。

表 2 「北」、「比」等の字体

東北	南北	背
比丘比	皆皆	昆

ア 「北」

9 5 個の「北」は、1 個を除いて全て右の方にはみ出している。（1 個は、右の方にはみ出しさず、正しい「北」でした。巻 8 4 突厥伝）

イ 「背」 = 「北 + 月」

「北」偏の左側の字体の横棒線が右の方にはみ出していました。

ウ 「比」

6 個の「比」全て、横棒線は縦棒線から左の方にはみ出していませんでした。

エ 「皆」 = 「比 + 白」、「昆」 = 「曰 + 比」

いずれも、「比」偏の横棒線は縦棒線から左の方にはみ出していませんでした。

(3) 結論

前(2)から、百衲本での記述者は、「北」を書く場合、左側の字体の横棒線が右の方にはみ出して記述している事が判明しました。

このことから、『隋書』においては、「多利思北孤」です。

3 中国における出版物での状況

中国で発行されている出版物を確認したところ、表 3 のとおりで、「多利思北孤」でした。

なお、中華書局発行の二十四史本『隋書』では、原本は「多利思北孤」であるが、後代の史書により「多利思比孤」に校訂したと註書き（【校勘記】）で述べております。

表 4 中国発行の出版物

叢書名	書物名	倭王	註書き	出版社
四庫全書 ※1	隋書	多利思北孤	なし	上海古籍出版社
四部備要	隋書	多利思北孤	なし	中華書局
二十四史	隋書	多利思比孤	有※2	中華書局

※1 四庫全書：中国清朝の乾隆帝の勅命により編纂された、中国最大の漢籍叢書

2 【校勘記】「比」原作「北」、據北史倭国伝、通典一八五、通鑑大業四年改

4 結論

以上により、古田武彦氏が述べられているように、『隋書』の原文は「多利思北孤」です。

故に、「多利思比孤」と記述する論者は、注書きなどで、「多利思比孤」とした根拠を記述すべきです。

5 多利思北孤の「北孤」

古田武彦氏は、『失われた九州王朝』で、「多利思北孤」は倭王の国書に国書に記せられた自署名である。－中略－

この名前とこの字面は、倭王の国書と見るほかない。

（「第三章－4『隋書』倭国伝の示すもの

－「自撰の署名」、298頁）

と述べられております。

最近、古田武彦氏は、『古代に真実を求めて』第9集（2006年3月発行）の講演録（2005年7月講演）で、

辞書を見ていただければお分かりになりますが、「倭（タイ）」には「弱い」という貧相な意味しかない。－中略－

中国は文字の國だから、文字でおとしめる方法も知っている。文字でおとしめて「倭国」と書いた。

（「講演及び対談録」古今和歌集 117頁）

と述べられております。

「倭」の意味を、『大漢和辞典（諸橋轍次著）』（1巻775頁）で確認すると、「よわい」という意味しかありませんでした。

つまり、「多利思北孤」の国書の内容について、煬帝は「不悦」、部下は「無礼」なこととしています。そのため、「大倭」を倭国（よわいくに）」と記述して、文字でおとしめた国名したものと思われます。（「大倭」については、後述します。）

そうであれば、「多利思北孤」の字面はどのような意味を持たせたか、疑問に思い改めて調べてみました。

「多利思北孤（タリシホコ）」は、足矛（帯矛）と思われ、「矛＝北孤」の「北」・「孤」の意味を『大漢和辞典』で調べると、表5のとおりです。

表 5 『大漢和辞典』での「北、孤」の意味

語句	意	味
北	① きた（方位）、きたする、そむく、にげる、わける、かくれる、姓 ② そむく、そむける、 わける (2巻 442頁)	
孤	みなしご、みなしごにする、ひとりもの、ひとつ、ひとり 王侯の謙称、官の三公に次ぐ者 さかる、いやしい、そむく、すてる、罪する、かへりみる、戯曲の用語、罪 (3巻 850頁)	

すなわち、「北」は方位の「きた」のほか、「そむく・にげる」などの意味で、貧相な意味にしかありません。

また、「天子は南面し、臣は北面す」で、臣下を指す言葉と思われます。

「孤」は、「王侯の謙称」としての意味がありますが、おしなべて、貧相な意味合いが強いことが分かりました。

このことから、「北孤」は「倭国」と同様に「タリシホコ」をおとしめる漢字だと思われます。

北

列傳卷第四十六 東夷 隋書八十一

特進臣魏 徵 上

高麗

王歲遣使朝貢不絕其國東西二千里南比千餘里都於

百濟

國東西四百五十里南比九百餘里南接新羅北拒高麗
海行三月有船半羅國南比千餘里東西數百里土多麋

靺鞨

靺鞨在高麗之北邑落俱有酋長不相撓一凡有七種其
其二曰伯咄部在果末之北勝兵七千其三曰安車骨部
在伯咄東其四曰拂涅部在伯咄東其五曰號室部在
拂涅東其六曰黑水部在安車骨西其七曰白山部在
得長爲奴僕也其國西北與契丹相接每相劫掠後因其

倭國

但計以日其國境東西五月行南比二月行各至於海其
三十年倭王姓阿每字多利思比孤號阿輩難彌遣使詣
往來大業三年其王多利思比孤遣使朝貢使者曰聞海

一人鉢帝十人其俗等皆空耳前

列傳卷第四十七 南蠻 隋書八十二

特進臣魏 徵 上

林邑

兵挑之梵志衆衆而陣方與賊爲比其志逐之至坑所其

赤土

國比拒大海地方數千里其王姓瞿曇氏名利富多寒
者執白拂夾道垂素網綴花王宮諸屋悉是重閣比戶比
千餘步色黃氣腥丹行一日不絕云是大食也南海比岸

眞臘

其國比多山阜南有水澤地氣尤熱無霜雪饑瘠羸毒

波利

四月行南比四十五日行王姓利利加名護溫那達官

列傳卷第四十六 東夷 隋書八十一

特進臣魏 徵 上

赤土

一人鉢帝十人其俗等皆空耳前髮無跪拜之禮以香

列傳卷第四十八 西域 隋書八十三

特進臣魏 徵 上

吐谷渾

西有流沙數百里夏有熱風傷斃行旅風之將至老駝
束以東祁連以南雪山以比東西四千里南比二千里皆

党項

東接臨洮西平西拒秦嶺南比數千里處山谷間每姓別

高昌

西三百里南比五百里四面多大山昔漢武帝遣兵西討
以避外寇非貴人不知其地有赤石山山北七十里有
食汚山夏有積雪此山之北鐵勒界也從武威西比有捷

龜茲

四百里西去疏勒千五百里西比去突厥牙六百餘里東

疏勒

朱俱波八九百里東比去突厥牙千餘里東南去瓜州四

于闐

于闐國都葱嶺之北二百餘里其王姓王子字示羽陳部
波千里北去龜茲千四百里東比去瓜州二千八百里大

鐵汗

西北去石國五百里東比去突厥牙二千餘里東去瓜州

米國

國王之支庶字閑拙都城方二里勝兵數百人西比去康

史國

國在康國二百四十里南去吐火羅五百里西去那色波國二百里東去柔國三百里東去瓜州六千五百里

烏那局

比去安國四百里西比去穆國二百餘里東去瓜州七千康國之種類也字阿監密都城五里勝參千人東比柔國皇

波斯

獻焉去海數百里東去穆國四千餘里西比去拂蘇四千

漕國

漕國在葱嶺之北漢時屬賓國也其王姓昭武字順達青木等香石蜜蜜黑鹽阿魏藥白附子比去帆延七百里東比到國六百里東比去瓜州六千六百里大業中

附國

附國者蜀郡西北二千餘里即漢之西南夷也有嘉良夷不相統一其人並無姓氏附國王字宜縉其國南北八百有薄緣美風俗亦同西有女國其東比連山縣數千里林臺春桑利豆迷桑婢藥大硤白蘭比利模徒那鄂生矣若使比狄無虞東夷告捷必將修輪臺之威禁烏壘

背

列傳卷第四十八 西域

隋書八十三

特進臣魏

徵上

吐谷渾

思歸化自救危亡然叛夫附父不可收納又其本意正自

列傳卷第四十九

隋書八十四

特進臣魏 徵上

突厥

至於海東止於山上其山在高昌西北下有洞穴狼入其多智遂擊却却波之西破他東走契丹比方戎狄悉歸之波可汗遠領所部沙鉢略勇而得最比東皆歸附之及高其集密俱犯比邊朕布告軍旅所在邀截望其深入一舉滅之而遠鎮偏師遂而摧弱未及南上遽已奔比應弦奔鮮西戎羣長皆有宿怨突厥之比契丹之徒切齒磨牙常其猶射雁何敵能當焉遠不服但皇王舊跡比正幽都荒雖復南瞻魏闕山川悠遠比面之禮不敢廢矣當今侍子日沙鉢略稱雄漢多歷世年自變之太甚過於此往雖與來權勢多為遠患今遠窮比每比為臣妾此之盛事振古略子曰染干號突利可汗居比方遣使求婚上太裴矩謂教習公禮妻以宗女安義公主上欲離間比夷故特厚其三百七十輩突利本居比方以尚主之故南徙度斤舊鎮軍元帥率啓民比征斛薛等諸姓初附于改民至是而教素軍河比值突厥阿勿思力俟斤等南度掠啓民男女六之情仍重書答啓民以為請比未靜猶須征戰但使好金河而東比幸啓民所居啓民善騎射善戰伏其大仇尊號皆比而稱臣受其可汗之號使者往來相望於道也

西突厥

可汗分統所部一在石國比以制諸胡國一居龜茲比其取戰而傳言其發大隋之兵資比番之衆左提右挈以之亂隨化及至河比化及將敗奔歸京師為比番突厥所

鐵勒

各姓姓不絕獨洛河比有僕骨同羅羣統拔也古覆羅並吾以西焉耆之比傍白山則有契弊薄落職乙咥蘇婆那延陁咥勒兒十餘達那等一萬餘兵康國比傍阿得水則等諸姓八千餘拂蘇東則有恩屈阿蘭比得九離伏溫等近三萬人比海南則都波等姓各別摠謂為鐵勒比荒開皇末音主比征納民大破步如可汗鐵勒於是

契丹

於松漠之間其後稍大居舊龍比數百里其俗頗與靺鞨等皆高麗率衆內附高祖納之安置於湯泉那頓比開落漸衆比從逐水草當遼西正比二百里依託紇臣水而居東西五百里南北三百里分爲十部兵多者三千丹之類也其南者為契丹比者號室韋分爲五部不相摠一所謂南室韋比室韋餘室韋未恒室韋太室韋並比四千里土地卑濕至夏則移向西比貨勒欠對二山多喪三年年唯四哭其國無鐵取給於高麗多貂南室韋比行十一日至比室韋分爲九部落繞吐紇山而居其部落又比行千里至鉢室韋依胡布山而住人衆多比室韋不知爲幾部落用樺皮蓋屋其餘同比室韋從鉢室韋西南之氣又西比數千里至大室韋徑路險阻語言不通尤多貂及青鼠比室韋時遣使貢獻餘無至者史臣曰四夷之爲中國患也久矣比狄尤甚焉種落繁

比

列傳卷第四十八 西域 隋書八十三

特進臣魏 徵 上

于闐

是羅漢比丘盧梅所造在石有碑支佛徒跣之跡于闐西五百里有比摩寺云是老子化胡成佛之所俗無禮義

列傳卷第四十九

隋書八十四 特進臣魏 徵 上

突厥

太定之日以戰國之時乘晉世驕結今時之恨近者盡

突厥

宰帖若有兩箇三箇日萬物何以得安比者亦知康羅德

鐵勒

有詞呼昌鐵勒忽比干具海昌比悉何案蘇拔也未渴達

列傳卷第四十九

隋書八十四 特進臣魏 徵 上

突厥

發下至小官凡二十八等皆母為之有唐弓鳴鏑甲稍刀人聞憚莫敢拒者竟意羅羅為禍大運便不得立心不服

波可汗還領所部沙鉢略勇而得報北夷歸附之及高貪汗二可汗等來拒戰敗走遁去時虜飢甚不能得食兵不已各遣使詣闕請和求援上不許會千金公主上

契丹

來據鄂多為邊患今遠窮北地為臣妾此之盛事振古長者也臣以畜牧為業優鈔為資倏來忽往雲飛鳥集

皆

列傳卷第四十六 東夷 隋書八十一

特進臣魏 徵 上

高麗

次驛屬次仙人凡十二等復有內評外評五部禪薩合官

韓朝

之今宴飲於前使者與其技臣起舞其曲折多戰鬪之容

流求國

為之自相樹立理一村之事男女皆以白紵纏髮從項

其不勝一軍置遣人致謝即共和解取關死者共聚

賦歛有事則均稅用刑亦無常准皆臨事科決犯罪即斷

倭國

至其都頻戰敗焚其宮室屠其男女數千人載軍實而

列傳卷第四十七 南蠻 隋書八十二

特進臣魏 徵 上

攻討漫以微弱稍屬於中國列為郡縣同之郡人不復

赤土

一人鉢帝十人其俗等胡耳前髮無跪拜之禮以香

真臘

戰爭其人行止皆持甲仗若有征伐因而用之其俗非王

列傳卷第四十八 西域 隋書八十三

特進臣魏 徵 上

者五十餘國西至西海東西四萬里中來朝貢復置都護

吐谷渾

厥喪有服制葬訖而除性貪忍有大麥粟豆青海

必不可治渾而道之人皆有情必當感悟不可潛謀非法受

不孝之名渾天之下臣是朕臣妾各為善事即稱朕心

光項

請以千餘家歸化上曰渾天之下臣是朕臣妾各為善事即稱朕心

康國

末以東祁連以南雪山以北東西四千里南北二千里

安國

祖廟以六月於之諸國來助祭俗奉佛為胡書氣候溫

皆為平頭王坐金駝座高七尺每聽政與妻相對大臣

女國

有魚鹽蒲葦之利東去高昌九百里西去龜茲九百里

昆

列傳卷第四十九 隋書八十四

特進臣魏 徵 上

突厥

錫鬻牛不歸且被集帥其數凡五百比奉爭長公叔相猜外

8月例会報告

○ 門脇禎二氏の「邪馬台国九州説転向遺稿」について

岐阜市 竹内 強

読売新聞（2008年7月18日付け）に、門脇禎二氏は『邪馬台国と地域王国』の著述で邪馬台国九州説に転向された旨の記事が掲載されていたことを報告された。

○ 「古代宮都の形成過程」について —古田史学の会・関西例会から—

岐阜市 竹内 強

平成20年7月の関西例会で、伊東義彰氏が発表された内容を紹介された。

飛鳥岡本、板葺、浄御原の各宮、さらに藤原宮と前期難波宮の比較検討をすると不思議なことがわかる。

時代的には古いにも関わらず前期難波宮のほうが新しい形態をなしている。平城宮、平安宮と同じ朝堂院式であり都の北の中心に大極殿を配置している。

などである。

○ 高市天皇説について

瀬戸市 林 伸禧

小林恵子著『倭王たちの七世紀』から高市天皇説を紹介された。

それに関連して、『日本紀』≠『日本書紀』説（佃収・兼川晋）を紹介された。

○ 加藤勝美氏の「古代史の再検討」に関連して

名古屋市 石田敬一

「東海の古代」に連載中の「古代史の再検討」について、問題点等について発表された。

○ 『隋書』巻八十一、列伝第四十六「東夷」の倭国王について

瀬戸市 林 伸禧

平成20年5月例会で発表された「多利思北孤」説について、補強した内容を発表

された。

また、古代日本を中国では「倭」と呼んでいたが、日本では『委』と自称していたのではないかと述べられた。

○ 古代史の再検討（6）—絶対年代の復元—

名古屋市 加藤勝美

「東海の古代」96号で掲載した論考を説明された。

9月例会に参加を

日時：9月14日（日）午後1時30分～5時

場所：名古屋市市政資料館（第1集会室）

Tel:052-953-0051

名古屋市東区白壁1丁目3番地

交通機関

- ・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- ・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分
- ・〃 「清水口」下車、南西徒歩8分
- ・〃 「市役所」下車、東へ徒歩8分

駐車場

- ・名古屋市市政資料館：12台収容（無料）
- ・ウィルあいち（愛知県女性総合センター）地下駐車場：南隣、有料（30分170円）
- ・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料（40分200円）

参加料：500円（会員無料）

今後の予定

10月例会：10月12日（日）名古屋市市政資料館

11月例会：11月9日（日）名古屋市市政資料館

例会は原則として毎月第2日曜日です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配布される場合は、なるべく「18部」をご用意します。